世田谷パブリックシアター
三軒茶屋発、地域の劇場による活動紹介冊子［キャロマグ］
Vol.5 Jan.2015
2015年1月号

CarroMag.

ワークショップ・レポート

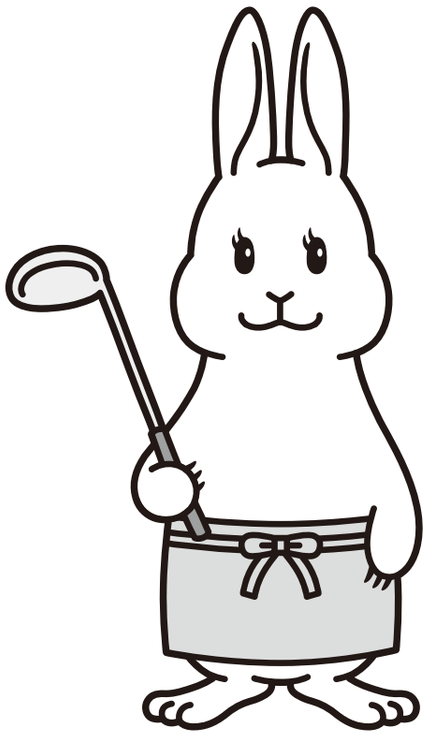
世田谷のこえ アーカイブプロジェクト 2012–14

世田谷で暮らす——移り住むこと、移り住むひと

三軒茶屋のキャロットタワーにある世田谷パブリックシアターには、組織名と同じ「世田谷パブリックシアター」（600席）と「シアタートラム」（200席）という2つの劇場があり、年間を通じていろいろな演劇やダンスの作品を上演しています。ですが、その活動は劇場での上演活動に留まりません！ 3つある稽古場や、セミナールーム、世田谷区内の小中学校や児童館、高齢者施設などで、小学生からお年寄りの方まで、ありとあらゆる方たちが参加できるレクチャーや演劇ワークショップを行っています。

キャロマグ（CarroMag.）は、そんな世田谷パブリックシアターの、通常目に留まることの少ないこうした活動を不定期でご紹介する冊子です。ご案内をつとめるのは、うさぎのキャロちゃんです。もし、ちょっとでもご興味をもって頂けるような内容がありましたら、今度はぜひ参加しにいらしてくださいね。

『キャロマグ』読んでね！



(Back Number)
バックナンバー

Vol.1 2013年3月号
ワークショップ・レポート
「地域の物語」2011-2012
1960年代の世田谷

Vol.2 2013年4月号
ワークショップ・レポート
高校生のための
演劇ワークショップ'12

Vol.3 2013年11月号
ワークショップ・公演レポート
ユース・パフォーマンス2013
トバズニハ『コンパス グルグル』

Vol.4 2014年3月号
レクチャーレポート 2013
舞台芸術のクリティック

CarroMag.

Vol.5 | Jan.2015

CONTENTS

ワークショップレポート

世田谷のこえ　アーカイブプロジェクト 2012-2014

世田谷で暮らす――移り住むこと、移り住むひと

「世田谷のこえ アーカイブプロジェクト」とは何か？ 2

ワークショップのプロセス（2012-2014） 4

冊子と演劇 すずきこーた（進行役） 5

記憶の交換と共有について 山田珠実（進行役） 9

ダンスシューズは要らなかった 山口ヤスヨ（WS参加者） 10

聞き書きが紡ぐ「ことば」のアーカイブ 園部友里恵（記録担当） 12

「他者」としての映像アーカイブ 阿部洋地（映像撮影担当） 14

劇場がアーカイブするとは？ 福西千砂都（学芸スタッフ） 15

CarroMag. Information
近日開催予定の主なイベント・ワークショップ 16
学芸スタッフから
おまけマンガ『たまにはこんな役 #5』
編集後記

「世田谷のこえ アーカイブプロジェクト」とは何か？

2012年からはじまった「世田谷のこえ アーカイブプロジェクト」は、世田谷に暮らす人々の“暮らし”や、それにまつわる“記憶”や“思い”を「世田谷のこえ」として集め、記録し、保存していくプロジェクトです。

2014年までの3年間は、「世田谷で暮らす――移り住むこと、移り住むひと」をテーマに「こえ」を集めていきました。

このプロジェクトのそもそものきっかけは、進行役を務めていただいたすずきこーたさんが、「東日本大震災とそれに伴う原発事故により福島から世田谷に避難されてきた方の話を聞いてみたい」とおっしゃったことに由来しています。ちょうど、東日本大震災から1年が経ち、劇場も、震災にどう向き合っていくか考えていたときでした。色々と検討していく中で、震災そのもの、そして、避難されてきた方を直接の対象にするのではなく、今、ここに暮らす誰もが同じように話せる場をつくりたいと考えました。そこで、各々の立場を越えたすべての人に共通するテーマとして浮かび上がってきたのが「世田谷で暮らす――移り住むこと、移り住むひと」です。どこに移り住むのか、あるいは移り住まないのかという選択は、避難されてきた方はもちろんのこと、あらゆる人にとって、その人が人生をどう生きるかということに深く関わっています。仕事のため、家族と離れたかった、恋人に付いて行った――移り住んだ様々な理由には、その人がそのとき、何を大切に思っていたかが表れてきます。だからこそ、その選択に関わる様々な人の「こえ」を聞き、アーカイブしていきたいと考えました。

2012年は、世田谷に移り住んできた外国の方をゲストにお迎えして、その方の国の料理を一緒につくって食べながら「移り住む」ことについて話をし、その様子を映像で記録するというワークショップを実施しました。外国から移り住んだ方のお話を聞くことをきっかけにすれば、演劇に馴染みのない方も気軽に参加したいと思えるのではないか、また、一緒に料理をつくって食べれば、参加者一人ひとりの思い出の味など食の記憶が浮かび上がってくるのではないかと考えて、ワークショップの内容を決定しました。

それを2回行ってみて、参加者の方からもっと自分たちでも話をしたいという思いを感じたため、2013年からは、「聞き書き」という手法を使って、参加者同士で相互に話を聞き合い、それをテキスト化するワークショップに切り替えました。隣のページの言葉は、そのとき紡ぎだされた「こえ」の一部です。これらの「こえ」は、参加者の手によって小冊子にまとめられました。また、初年度から引き続き、ワークショップの様子を映像でも記録し、小冊子と合わせて、劇場で保管しています。

『キャロマグ』Vol.5では、3年間の「世田谷のこえ アーカイブプロジェクト」で具体的に何が行われ、参加者やスタッフが何を感じ、考えてきたのかをご紹介したいと思います。

私にとって、ふるさとは場所ではなく、人。

引っ越しの日、
おじいちゃんが
こっち見ないで
「明日帰ってきても
いいんだよ」って。

病気をして、そういう大変なことをとにかく受け入れて、
耐えるしかなかったから。
それと比べれば、どこに住むとか、
そんな大ごとではない、って感じですかね。

なぜ世田谷がこんなに愛しいかというと、
ここでずーっと子どもを育てたからでしょうね。

私が海が好きとか言ってたら、
彼が海ではたらく仕事について
石垣に行くことになって、
まあ、ついていかないとダメかなって。

この町にも、母の面影がある。

「生存する」から「生活する」に。

ワークショップのプロセス 2012年度

**世田谷に移り住まれた外国籍の方をゲストとしてお招きし、
出身国のお料理をみんなでつくって食べながら
話をするワークショップを2回行い、映像でも記録しました。**

Vol.1 9月8日（土）

ゲスト **ナレンドラ・ケピティポラさん**（スリランカ出身）

現在は世田谷区中町でスリランカ紅茶とカレーの店を経営。また、スリランカ文化教室やスリランカ旅行の企画のほか、各裁判所の法廷通訳・翻訳や神奈川県警、検察庁通訳・翻訳、NHKの画像翻訳も行っています。

つくったもの **スリランカカレー**（大根カレー、バターチキンカレー、豆カレー、ミンチカレー）

参加者が書き出した、印象深いナレンドラさんの言葉

「私は地球人だと思っていますから。
スリランカ人とか日本人とかではなく」
「どこにでも住む権利がある」
「その場所のものごとに合わせて暮らす」
（ワークショップ後、参加者に記入をお願いした「こえ」収集用紙より）

スリランカカレーの盛り合わせ

Vol.2 12月24日（月・休）

ゲスト **トライラタナシリチャイ・キッティワンさん**（タイ出身）

日本で生まれたので「優子」というニックネームを持っています。2歳でタイに戻りましたが、1年半前に再び来日。アートに関心があり、多摩美術大学大学院に在学中。「ココナッツミルクロールクッキー」というタイのお菓子のブランドデザインについて研究しています。※ワークショップ実施当時

つくったもの **ガッパオ、カノム・ブアロイ**（白玉団子入りのタイ風おしるこ）

参加者が書き出した、優子さんや他の参加者の印象深い言葉

「住む場所を選ぶことは、生き方を選ぶことだと思う」
「終の住処を考える」
「タイのケーキは甘い。日本の方がおいしいです」
「もっと狭い方が愛着が持てるのかも」
（ワークショップ後、参加者に記入をお願いした「こえ」収集用紙より）

ガッパオ

つくって…

食べて…

おしゃべり！

冊子と演劇

［進行役］**すずきこーた**（演劇デザインギルド）

「震災や原発事故に対して、演劇は、劇場は、私たちは何が出来るのだろうか？」

2012年始め、劇場での活動ではないのですが、東京に避難してきた方々と出会う機会を得ました。カラダを使ってゲームをしたり、思い出を劇にしたりしながら、避難生活のことを聞きました。「話して楽になった」とは言えません。でも「話したい」気持ちがあるのが強く伝わってきました。

そんな活動を細々と続けている中で、世田谷にも避難している人が少なくないことを知り、「その方たちの今の声を聞いておくべきだ」と考えるようになりました。そのことを世田谷パブリックシアターのスタッフに話したところ、一緒に企画を考えることになり、このアーカイブプロジェクトが始まりました。最初は震災翌年という難しさもあり、外国から世田谷に移り住んでいる方に母国の料理を教わり、一緒に食べながら「移り住むこと」について話すスタイルをとりました。

しかし参加者たちがもっと話したがっていて、その声を残していく作業も必要だと感じ、「地域の物語」で長年続けてきた「聞き書き」をすることにしました。15年ほど前、当時関西で高校の教員をなさっていた藤本英二さんから学んだ方法です。「話を聞き、書き起こす」というシンプルな方法ですが、話された方の「生き方」「感じ方」「価値観」が大きな力となって浮き上がります。また「聞いた人がその心に響いた話」を中心に書くため、話をした人だけでなく、聞く人の思いも反映されます。

冊子に声を載せて他の人に届ける、そしてその声を受け取った人が感じたことを話す……。私は聞き書きの構造や持つ力が、とても演劇的だと思います。私たちは冊子という媒体の演劇をつくったのです。

ワークショップのプロセス 2013年度

2年目からは、話し合うことにフォーカス。
「聞き書き」という手法をつかって参加者同士で話を聞き合い、
最後は編集して、冊子にまとめました。

2人組で「聞き書き」

第1回 10月26日（土）

折り紙を自由に折ったり破ったりして今の自分の気持ちを表現し、稽古場の好きな場所に置きました。それらを見て回りながら、今どういう気持ちかを伝えつつ自己紹介。ペアで互いの手をマッサージして身体をほぐしてから、２人組で「今住んでいるところに住むことになった理由」を聞き合い、書いたものを発表しました。次回は、実際に誰かの家に行ってみたいと伝えると、参加者の一人が空き部屋を提供してくれることに！

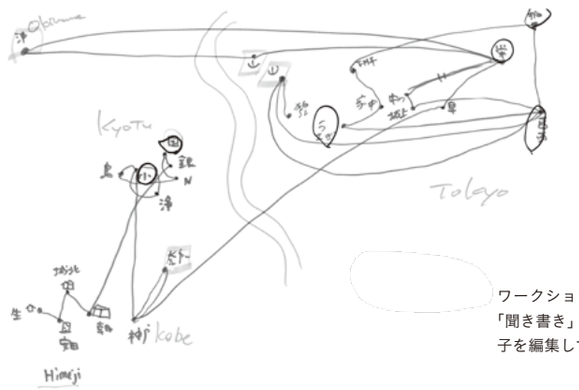
↓

宿題：家の写真を５枚撮ってこよう。

第2回 11月4日（月・祝）

空き部屋へ。物のない部屋の中で思い思いに過ごし、そのとき感じたこと、自分の引越しのことなどで思い出したことをカードに書いて、全体で共有。自分が生まれてから今まで移り住んできた経緯を紙にまとめた「移動の軌跡」を作成し、その紙と、宿題で撮ってきた家の写真を見ながら、３人組で「今まで住んだところ」について聞き合いました。聞いた内容から印象に残ったことを３〜４行にまとめて発表して、おしまい。

移り住んだ
記憶を探ります。



ワークショップ参加者による「移動の軌跡」。

ワークショップの様子。「聞き書き」をもとに、冊子を編集していきます。

編集会議！

第3回 11月17日（日）

身体をほぐした後は、既存の「聞き書き」を読んで、読み手に伝えるためのポイント（より具体的な数字を入れる等）を考えました。どんな冊子をつくるか全員で話し合ったところ、参加者のヤスヨさんが編集作業を担当してくれることに。前回の３人組に分かれて「移り住んだときに、どんな変化があったのか？　あるいは、なかったのか？」というテーマで話を聞き合い、書いたものを読み合いました。

第4回 11月30日（土）

前回書いた「聞き書き」を改めて読んだ後、同じ３人組に分かれて、特に気になったところを更に詳しく聞いていきました。冊子の編集会議も挟みながら、ひたすら書いて、最後にタイトルを決定。完成した聞き書きは、声に乗せて読んでみました。

そして発表会!

第5回 12月8日（日）

ワークショップ参加者以外の人も招いて、「聞き書き」を「声に乗せる発表会」を行いました。最後は、「今、改めて思う『移り住むこと』」を書いて、各自の感想を共有。おつかれさまでした！

↓

2014年1月19日（日）に、都合のつく参加者で集まって、
冊子の製本作業を行いました！

ワークショップのプロセス 2014年度

3年目は特に「身体の記憶」がキーワードに。
昨年度につづき、冊子や映像のアーカイブを試みました。

第1回 6月21日（土）

自己紹介のあと、参加者全員で背の順や手の温かい順等に並んだり（喋らずに！）、稽古場の床に世界地図をイメージして、その中心を「キャロットタワー」とした時の（1）今住んでいる場所（2）生まれた場所（3）今よりひとつ前に住んでいた場所に移動してみたり（やっぱり、喋らずに！）、全員と握手をしたりしながら、知り合っていきました。後半は、2013年度のワークショップでつくった冊子を読んで、「聞き書き」の練習をして、また来週！

第2回 6月29日（日）

名前の再確認のあと、まずは一人で、それから2人組になって互いにマッサージして身体をほぐします。それから「懐かしい音の記憶」や「手触りの記憶」など、身体にまつわる記憶を探って「聞き書き」開始。3人組になって、持ち寄った「移り住んでもずっと手の触れるところにあるもの／あるだろうもの」をきっかけに、「移り住むこと」について話していきました。話した内容は身体表現にもして、全体で共有。

第3回 7月5日（土）

「幸せなら手を叩こう」で遊んでから、子どもの頃に使っていたテレビのスイッチに触ってみる「手触りの記憶」「初めてのトイレの記憶」などを探っていって、「聞き書き」の続き。グループごとに前回書いたものを読んでから、もっと詳しく聞いてみたいことについておしゃべりして、まとめました。書いたものを声に出して読み合い、また明日！

第4回 7月6日（日）

ストレッチで身体をほぐしてから「だるまさんが転んだ」で遊びました。それから2人組になって擬音を口に出したり、目を閉じた相手を呼び寄せたりして視覚以外の感覚を広げ「温度の記憶」を思い出していきました。その後は「聞き書き」の続き。また、ワークショップ中に印象に残った言葉などを紙に書いて、それを稽古場の床に広げてその中に立ち、書いた「聞き書き」を声に出して読んでみて、おしまい。

2014年度の
ワークショップ風景。
↓

第5回 7月12日（土）

隣の人の背中をさすったり、隣の人と自分の膝を交互に叩いたりして身体をほぐしてから、一人ずつ、この1週間で印象に残った出来事を紹介。それから、これまで書いてきた「聞き書き」を、喋った本人に読んでもらい、事実関係を中心に確認してもらって、最終原稿をつくりました。読む順番や、並び方を考えて、発表！　冊子のために、それぞれの「聞き書き」にタイトルをつけて、並び順を考えました。10月4日に会いましょう！

発表会 10月4日（土）

参加者の書いた「聞き書き」をまとめた冊子『世田谷で暮らす ―移り住むこと、移り住むひと』と、ワークショップの様子が映った映像が完成！「『こえ』を届ける発表会」を行いました。観に来てくださった方に冊子をお渡しし、ワークショップ参加者が実際に声に出して「聞き書き」を読んだり、全員で一緒に映像を見たりしました。

記憶の交換と共有について

［進行役］山田珠実（振付家・ダンサー）

2013年、2014年と、「世田谷のこえ　アーカイブプロジェクト」に進行役のひとりとして参加しました。2014年は特に「身体の記憶」というキーワードのもと、身体をほぐすウォームアップをしたあとに、「手触りの記憶」や「音の記憶」「初めてのトイレの記憶」など、五感にまつわる記憶を出来るだけ詳細に思い出すというエクササイズを行いました。

実際に身体を動かし、探し当てるようにして思い出した出来事は、他の人に話すと「あ、分かる！」という共感を呼びやすいようです。たぶん、聞いた人が、その人自身忘れていた、よく似た場面や感覚を思い出すきっかけになるからでしょう。例えば本棚の古い本を開くと、点のような虫がチョロチョロと慌てて動く様を目撃した話。子どもの頃、トイレに座っていて「あ、自分はいつか死ぬんだ！」と不意に、気がついた話。「雪の朝、目が覚めると音がない。」という音の記憶。白鳥の形をした「おまる」の持ち手の感触など。忘れていた物や出来事を五感とともに思い出し、語りあって交換する、それだけで十分に楽しいことのようでした。

そして「思い出して語ること」が「聞き取って、書き残すこと」と連動することで、深い歓びに結びつく場面を何度も見た気がします。他者によって再構成された自分の記憶を、読んでみて確認すること、あるいは聞き取った他者の記憶を咀嚼し、編集することは、自分自身に対する再発見を促すようにも見えました。

プロジェクトを通して、「記憶」がその人を深いところで支えている財産であるのを改めて感じます。財産を皆で共有し、互いに少し豊かになった。そんな試みだったように思います。

ダンスシューズは要らなかった

［WS参加者］山口ヤスヨ

世田谷パブリックシアターのワークショップには、子どもが小さかったころ、何回か参加させたことがあった。末っ子は生活工房の「14才のワンピース*」が最高に楽しかったらしい。私は一度も参加したことがなかったが、数年前スポーツクラブから派生したダンスチームで、G.W.恒例のフリーステージ*の舞台に立った。その時はまず稽古場に感激した。ひゃ〜カッコイイ!! N.Y.のステューディオみたい！（行ったことないけど…）と仲間とはしゃいだ。

「世田谷で暮らす」のワークショップが何をやるのかはよくわからなかったが、あの稽古場でやるならちょっといいかも、ファシリテーターは演劇の人と振付家の人だし、とダンスシューズ持参で参加してみたら、そっちじゃなかった。ホントに聞き書き、参加者の話を聞いてゴリゴリ原稿を書くのだった。

しかも最初に配られて読んだのは、鎌田慧*の本のコピー。そ、そんな大御所の社会派ルポを手本に何をせよと？「こんなふうに、聞き書きを形に」。進行役のこーたさんとたまちゃんが話すのを聞いて、「え？ それを素人が？ 5回で？ アタマ大丈夫？」と思ってしまった。（私は出版社のバイトあがりのエディトリアルデザイナーでそっち方面には土地勘があるのだ）。

しかし、やり始めてみたら、意外にもはまってしまった。こーたさんとたまちゃんの、何を話しても受け入れてくれる感じと、最初にふわふわと身体を動かすことが楽しかった。身体と気持ちがじんわりほぐれて行くような。

年齢も経歴もさまざまな参加者は、皆とても正直に相手と自分に対峙していた。移り住んだ場所を話すことは生育歴を語ること。家族との関わり、特に母親の話が女性参加者からよく出た（母って責任重大…）。

そして、聞いた話を書く。手が痛くなるほど文字を書くのも気持ちがよかった。書いて書いて、消しゴムや二重線で消したり、別のところにつなげたり。こんなにも書きたいのか、自分!?（知らなかった…）

皆で聞き書きしたものを読み合う「こえに乗せる発表会」で、他の人に読んでもらった私の話は、オリジナリティに溢れ、かけがえのないものに思えた。

結局私は2年連続でワークショップに参加し、冊子作りまでやってしまった。2回目の「こえを届ける発表会」で、ワークショップの研究をしている大学院生そのべちゃんの「いちばん新しい演劇の形を観たと思います」という発言が今も心に残っている。やっぱり稽古場のカッコ良さは伊達じゃなかった!!

*14才のワンピース…好きな言葉を集め、デザイナーとの対話の中から、心模様を色や形に表して布にプリントしていき、ワンピースをつくるワークショップ。2012年12月、（公財）せたがや文化財団 生活工房主催で、全3回にわたり、中学2年生の女子を対象に行われた。　*フリーステージ…世田谷パブリックシアターの劇場スタッフが、世田谷区内で活動する文化団体とともにステージをつくりあげる取り組み。1997年4月の開館から毎年、ゴールデンウィークの時期に行われる。　*鎌田慧（かまた・さとし）…1938年〜。被差別者・底辺労働者など、弱者の立場に依って、社会問題全般のルポを書いているジャーナリスト、ノンフィクション作家。代表作に、『自動車絶望工場』（講談社文庫）、『六ヶ所村の記録』（講談社文庫）、『大杉榮 自由への疾走』（岩波現代文庫）など。

冊子『世田谷で暮らす――移り住むこと、移り住むひと』（2013）より。この文章は、ある参加者の語りを別の参加者が書き起こしたものです。

語り手＝のってぃ

『「そろそろ寝なよ」って言ってくれる人が居ない』

書き手＝サトシ

認知症のプログラムで、好きな石をひろってきて顔を書くというものをやったんですけど、その時の見本として、母と一緒につくったのがこれなんです。プログラムは無事終わって。引っ越しするときに、なんかこれは絶対新しい家に持っていくって思ったんですよね。それで当時、これを毎日見るたびに涙が出てましたね。引越して３ヶ月ぐらいは。

もう27になってました、引越しを決めたときは。もう出ないとダメだなって思って。自立したいって思って。それまでは、まだ母のそばにいないとって思ってました。母にはほぼ事後報告で、「ここ引っ越すから」って。最初はすごいさびしそうにしてたみたいですけどふっきれると早いタイプみたいで。いつの頃からか、「一人が気楽」なんて言ってました。それより、こんなに母に感謝するんだ！って、私が。それがびっくりで。なんだろう、「そろそろ寝なよ」って言ってくれる人がいないとか。いろいろ気づくことがあって。それがあったんでしょうね、あれを見て毎日涙が出たのは。

一人暮らしをしてみての感想は、やっぱり楽しかったですね。最初舞い上がってちょっと高いアンティークのイスとか買っちゃって。それは今は実家にあるんですけどね。なんか引っ越しのときって金銭感覚くるいますよね。ヤカンもちょっとカフェっぽいのとか買って、わかります？ちょっと口が細いやつ、ドリップする用に。私、ドリップしないのに。

今は引っ越してきて、７年です。そう、ずっと三茶の同じところで。うち４畳半なんですよ。トイレ共同の女子限定のアパートで。最初だし、ずっといる気もなかったので、とりあえずで引っ越したんですけどね。なんだかんだで引っ越せず。

定住したいとかは今はあんまり思っていなくて、ずっと住んでた家とか、ずっと住んでた土地とかが自分にはないからこそ、逆にそれがどんな気持ちなのか、興味ありますね。

イラスト＝参加者による「移動の軌跡」より抜粋

聞き書きが紡ぐ「ことば」のアーカイブ

［記録担当］園部友里恵
（東京大学大学院教育学研究科博士課程）

そのべ・ゆりえ／1988年、三重県生まれ。東京大学大学院教育学研究科博士課程在籍。「演劇と地域社会」をテーマに、地域社会における公共劇場の役割をワークショップという場に着目して探究している。現在、高齢者の演劇活動に特に関心を抱き、自らインプロ（即興演劇）のワークショップを実践しながら研究を進めている。

「ここだけもう全然違ってるんですよ、空間の立ちあがり方が。何かこう、秘密を共有してる感じがこの3人にはあるんですよ。それは例えば、初日（の映像）には全然、その3人の空間はなくて、個別の空間しかなくて。それが5日目になるとこんなふうになったってことですね。それはやっぱりここの、3日目の、共有した時間なんじゃないかなって」

10月の発表会に向けた打ち合わせで集まった9月、それまでの5日間のワークショップの映像を見ながら、映像記録担当の阿部洋地さんが語った言葉です。記録担当として携わらせていただいた私にとって、この言葉はこのワークショップの特徴を表すものとしてとても印象に残っています。

「世田谷で暮らす―移り住むこと、移り住むひと」は、人々の暮らしや記憶を「世田谷のこえ」として集め、記録し、保存していくプロジェクトで、2012年より継続されているものです。

進行役は、「演劇デザインギルド」のすずきこーたさん（こーたさん）と、振付家・ダンサーの山田珠実さん（たまちゃん）。参加対象者は、「世田谷で暮らしているひと、世田谷で暮らしていたひと、世田谷で暮らしたいひと」。

このプロジェクトでは、「聞き書き」という手法を用いて、参加者の「こえ」を集めた聞き書き集が年度ごとにつくられています。この聞き書き集が「アーカイブ」の1つのかたちです。加えて、この聞き書き集の作成プロセス自体も「アーカイブ」するために、ワークショップの様子が撮影されています。

2014年度には、6～7月にかけて全5日間のワークショップが実施されるとともに、10月には「『こえ』を届ける発表会」という一般の方々も交えた企画も行われました。

全5回のワークショップは、毎回、まずシアターゲームを用いて、参加者同士が知り合うことから始まりました。そして、たまちゃんの進行で、音や手触り、温度等の、五感をめぐる記憶や、子どもの頃に持っていたモノについて、自らの身体に刻まれている記憶を少しずつ呼び起こしていきました。その後、メインの「聞き書き」に取り組みました。

「聞き書き」といっても、決められた手順があるわけではありません。こーたさんは「聞き書き」のポイントとして次のようなことを挙げました。

- 録音せず、メモをとりながら聞く。ただし、全てをメモしようと思う必要はない。
- 語り手の口癖や口調もメモしておく。
- 語り手が一方的に話すのではなく、聞き手も質問OK。
- 聞き手が興味を持ったら、その点について角度を変えて質問をしてみる。
- 印象に残ったこと、ひっかかったことを3つ程度選んで、書き順を考え、文章化していく。
- 一人称で書く（質問は省いて、語り手が1人で話し続けているように）。

2014年度の発表会の様子
➜

↑
自分たちが映った映像アーカイブを、改めて見つめる参加者たちの様子。

語るテーマとして進行役から提示されたのは、「特に大事にしているわけではないけれど、移り住んでもずっと持ち続けているもの」。参加者は、実際に持ってきたそのモノを目の前にして語ります。そして、語りの内容は「移り住むこと」へとゆるやかに移っていきました。

また、聞き書きは、3人組をつくり進められていきました。3人の中で1人が語り、2人が聞く・書く、というのを順に繰り返し、参加者全員が語り手と聞き手（＝書き手）の両方を体験しました。

私は、この聞き書きによって生み出された「ことば」にとても関心を抱きました。

ここで語られ、生み出された「ことば」は、語り手の語りを聞いた人が、その人に「なって」書き記した「ことば」であると思います。例えば、聞き手が自らの興味にしたがって質問し、書き記す言葉を選んでいく中で生み出された「ことば」には、語り手が語ったものであるにもかかわらず、聞き手の姿が現れてきます。それに聞き手がまた別の人だったら、語る内容自体も異なってしまうかもしれません。

すなわち、聞き書きによって生み出された「ことば」とは、個人では決して生み出すことのできない、他者との関係の中で生み出されたものなのです。そうした「ことば」や「物語」は決して大きなものではありません。しかし、何気ない日常のちいさな物語が持つおおきな豊かさが感じとれるものになっていると思います。

最後に、公共劇場という場の役割について、今回の記録担当を通じて考えたことを書きます。市民劇の上演や演劇ワークショップの実施など、「市民参加型」事業を行うことが、現代における公共劇場の役割の1つになっています。しかし、そこで私が思ってしまうのは、そうした「市民参加型」の事業には、あまりにも市民の「自己」表現があふれすぎているのではないか、ということです。

それに対して、このワークショップや聞き書き集には個人の強い「自己」表現はありません。モノや身体に染みついた1人1人の物語を、それを聞き、書き記す人がとても丁寧に、繊細にあつかっています。「聞く」「書く」という行為を通して、相手の物語の中に少しずつ自分が入りこんでいきます。このワークショップは、そうした複数の人々による「自分たちの物語」をつくりだしていく場なのではないでしょうか。

またこのプロジェクトが今後も継続されることで、こうした「自分たちの物語」はさらに「アーカイブ」され続けていくのだと思います。そして世田谷パブリックシアターは、「アーカイブ」されたものを、50年後、100年後にこの地域に暮らす人々と引きあわせてくれる場になるはずです。そこでまた新たな人々の「ことば」と「物語」が生まれること、それらをきっかけにおしゃべりができること。こうした場として公共劇場があり続けていくことはとてもすてきなことだと感じています。

「他者」としての映像アーカイブ

あべ・ひろくに／1982年、新潟生まれ。撮影、映像制作。専門は撮影。撮影技術会社に勤務の後、フリーランスに。劇映画、ドキュメンタリー問わず様々な作品、プロジェクトに携わる。「世界」と「私」と「カメラ(機械)」の関係において撮影行為を見出し、活動している。

［記録撮影担当］**阿部洋地**

「世田谷のこえ　アーカイブプロジェクト」では、映像によるアーカイブを行っています。アーカイブは保存・保管を意味する言葉ですが、他者に公開されることを前提としています。ここでいう他者とは、５日間のワークショップに参加した参加者自身も含まれています。2014年度は撮影された映像を編集して上映する日を設け、出来上がった冊子とともに公開しました。月日は短いながらも、アーカイブの一連のサイクルを行うことが出来たと思います。

10月４日の発表会で上映された映像を見たある参加者が、将来生まれてくるであろう自分の子供にこの映像を見せたいという感想を述べてくれました。その感想を受けとった時、映像でアーカイブするという行為は、「私」がいなくなった世界を想像し、「私」という範囲を超えた世界をイメージすることのような気がしました。

過去の記憶を思い出すことは、別段特別なことではなく、誰しもが日常的に行っていることだと思います。ある瞬間は鮮明によみがえり、ある瞬間はもやもやとして、ある瞬間は思い出すことさえ忘れ去られた状態になっています。人はすべての過去の出来事を記憶することはできません。ある１つの出来事を記憶しようとするが故に、こぼれ落ちてゆく出来事が無数にあり、意識的にせよ、無意識的にせよ、記憶の選別のようなことを行っているのだと思います。そしてそれは、無意識的に行っていたとしても、「私」が行っている限り「私」の範囲から逃れることはできません。

映像を見る経験とは、誰しもが事後的に他者としてしか関わることができない経験です。たとえ本人が画面に映っていて、声を発していたとしても、それは他者であって、映像を見ている方が自己になります。

前述したある参加者の感想は、他者として再び生きられた映像の中の自分の姿を見て、自分の記憶の中にあることや、聞き書きで語ったこと、そして冊子に記された文章（つまり「私」の範囲内）とは違う、私はこのように生きてきたのだ、という生きざまのような姿を感知して、抱いた感想なのだと思います。だからこそ、まだ見ぬ自分の子供に、そして生まれてくるであろう子供は知り得ない、2014年のある日の生きざまを見せたいと思ったのだと思います。

映像でアーカイブすることは一体どういったことであるのか、私自身明確に答えがあるわけではないですが、映った人の生きざまを、深くえぐるようなことなのかもしれません。

劇場がアーカイブするとは？

［スタッフ］**福西千砂都**（世田谷パブリックシアター学芸）

世田谷区の人口は、おおよそ87万人です。そこには、87万通りの人々の暮らしがあります。それらの暮らしは、ほとんどが注目されないままに、忘れ去られていきます。

日常では、一人ひとりの人生を丁寧に見る機会はあまりありません。何となく、それぞれの人生のぼんやりとした輪郭だけを捉えて、どれも似たようなものだなと感じるのではないでしょうか。けれど、一人ひとりの人生をつぶさに見ていったとき、ひとつとして同じものはない、その人だけの「こえ」が浮かび上がってきます。そうした小さな「こえ」たちは、かけがえのないものです。

2013年のワークショップを終えた後、ある参加者が「自分の人生もけっこう面白いなと思った」と語ってくれました。その参加者の人生が例外なのではなく、世田谷で暮らすすべての人の、そして、この世界に暮らすすべての人の人生もまた、「けっこう面白い」のだと思います。

今回のワークショップでは、参加者は身体を動かし、他の参加者と話しながら、自分でも忘れていた暮らしにまつわる記憶や思いを思い出していきました。他の人と話すということは、単に記憶を呼び覚ますだけではありません。自分と他者の記憶を互いに共有し、再構成することによって、「私」の記憶から、「私たち」の記憶へと変換していきます。それは、参加者間で起こるだけでなく、劇場という場でアーカイブを“閲覧”した人々とも共有されます。劇場の舞台で行われる演劇が、その演劇をする人と観る人によって共有されることと同じことが起こっているのです。

これまで、劇場のアーカイブは、主に戯曲や舞台上演の記録が中心でした。しかし、このプロジェクトで集められた「こえ」もひとつの演劇の形と言えると考えています。そして、これからは、世田谷で暮らす一人ひとりの「世田谷のこえ」もアーカイブしていくことが、世田谷区の劇場として、重要だと思っています。

また、今後は、このアーカイブの“閲覧”の場を定期的に担保し、“閲覧”した人もまた、そこに新しい「こえ」を加えていくことのできる仕組みをつくることで、世田谷に暮らす人々の「こえ」が積み重なっていく場をつくっていきたいと考えています。

2013年と2014年に作成した小冊子は、郵送代実費でお送りいたします。ご希望の方はご連絡ください。お待ちしております。

〒154-0004
世田谷区太子堂4-1-1　キャロットタワー5階
世田谷パブリックシアター
「世田谷のこえ アーカイブ」係
TEL 03-5432-1526／FAX 03-5432-1559

近日開催予定の主なイベント・ワークショップ

世田谷パブリックシアター演劇部 中学生の部　第三期

『みんなの「おもしろい！」をつくる。』Ver.2 登場人物をつくる

日程…2015年2月14日(土) 14時〜16時、15日(日) 10時〜16時
参加費…1,000円(全2回)　**対象**…中学生
会場…世田谷パブリックシアター稽古場

中学生のみんなが今「おもしろい！」と感じていることをたくさん集めて、みんなだけの演劇の「登場人物」をつくってみるワークショップです。

地域の物語2015

『介助・介護をかんがえる(仮)』発表会

日程…2015年3月22日(日) 15時〜
料金…入場無料(要事前申込)　**会場**…シアタートラム

私的な生活の場に他者が存在する介助・介護の現場では、介助・介護をする側、される側の関係性と距離が問われる複雑な場所です。実際に仕事で、あるいはご家族を介助・介護されているワークショップ参加者は、身体や言葉を使いながら、介助・介護に改めて向き合い、考えています。そうして考え、発見したことをシアタートラムで発表します！

4都市連携プロジェクト

『みんなの産み育て』発表会

日程…2015年3月22日(日) 10時30分〜18時
料金…入場無料／入退出自由
会場…世田谷文化生活情報センター ワークショップルーム

子どもを産み、育てること。この大きなテーマのもとに集まったワークショップの参加者たちは、一人ひとりの経験や想いを出発点に、約2か月にわたって、いろいろな人の話を聞き、からだを動かし、自分自身をみつめながら、みんな一緒に考えてきました。そうして考えたあれこれを、展示作品とパフォーマンスを通して発表します。

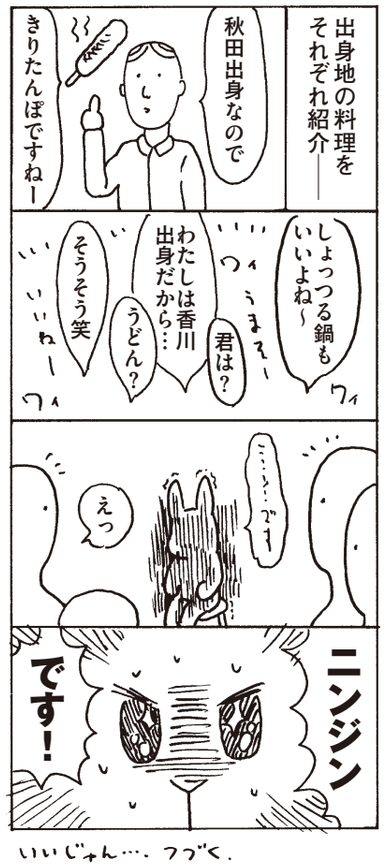
＊パフォーマンス(入場無料／要事前申込)の時間は、決まり次第、劇場ホームページ等でお知らせいたします。

学芸スタッフから

★2015年！ バック・トゥ・ザ・フューチャーPART2の未来がついにやってきました。映画をはじめてみたのは小学生のとき。主人公マーティが覗きみるビデオ会議に衝撃をうけたものです。当時の我が家は、黒電話。そばを通ると振動で、ちん、と鳴ってました。今ではスカイプ会議は当たり前。思えば遠くにきたもんだ。[くたに]

★一年の計は元旦にあり、というらしいですね。私の元旦は治りかけのインフルエンザで臥せっていました。この世に生を受けて30年近く。思えば子どものころから大晦日正月と高熱を出す人間。ですので、今までは元旦に一年の計なんて無理でした。今年こそ、と布団の中で考えた目標は「宝くじ一等当選」。なんとも他力本願です。[にら]

たまにはこんな役 #5



編集後記

「キャロマグ」、おひさしぶりの発刊です！

今回の特集は、「移り住むこと」をテーマにした3年間のアーカイブプロジェクトにフォーカスし、ワークショップに関わった方々に寄稿していただきました。それぞれの立場からの視点によって、少しでもこのプロジェクトが立体的に見えればと思います。いかがでしたでしょうか？

最近、関東大震災のことを調べていて、寺田寅彦が書いた1923年9月1日の日記を読んだりもしました。彼はやがてその体験から、天災について様々な考察を試みています。「こえ」をアーカイブしていくこと。その意義はもしかしたら、もっと後になってわかることかもしれません。

ところで、このプロジェクトが興味深いのは、個々人の選択と意志によってなされた「移り住むこと」という体験が、他のワークショップ参加者によって「聞き書き」され、冊子としてまとめられ、さらには映像化されていくうちに、どこかその本人から離れてひとり歩きしているようにも思えるところです。それはやっぱり、ブログやSNSにはできないことであり、他の人と一緒につくりあげていく何かであり、すずきこーたさんが語ってくださっているように、とても演劇的だなあ、と思います。[ちから]

[キャロマグ]
Vol.5 / Jan.2015

発行日
2015年1月30日

発行
公益財団法人せたがや文化財団
世田谷パブリックシアター
〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4–1–1
Tel. 03-5432-1526
http://setagaya-pt.jp

編集
藤原ちから、落雅季子(BricolaQ編集部)
大谷薫子(本のモ・クシュラ株式会社)

企画
恵志美奈子、九谷倫恵子、
田幡裕亮、福西千砂都、韮澤大地
(以上世田谷パブリックシアター学芸)

デザイン
ウチカワデザイン

印刷・製本
株式会社リヒトプランニング

協賛
TORAY 東レ株式会社

後援
世田谷区

©2015 Setagaya Public Theatre

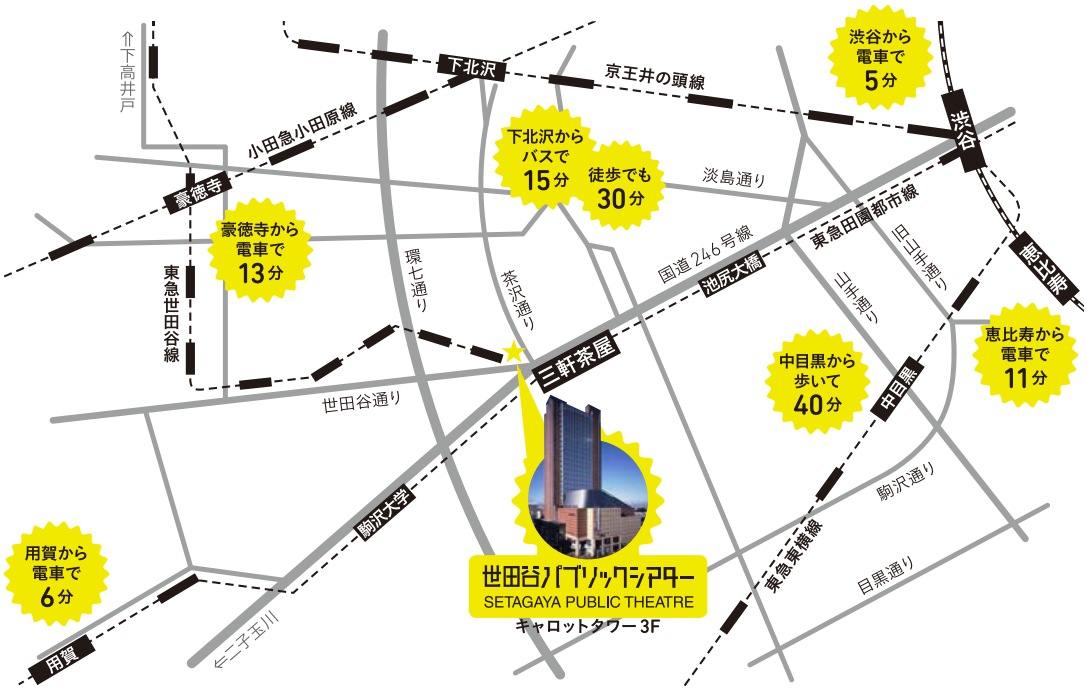
世田谷パブリックシアターとは

世田谷区がつくり、(公財) せたがや文化財団が運営している、演劇やダンスのための専門劇場です。三軒茶屋のキャロットタワーの中に、世田谷パブリックシアター (約600席)、シアタートラム (約200席) の2つの劇場と稽古場、作業場などを擁し、ワークショップやレクチャーなどの参加体験型事業にも力を入れています。

世田谷パブリックシアター (主劇場)

シアタートラム (小劇場)

世田谷パブリックシアターへのアクセス



お問い合わせ 世田谷パブリックシアター

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー5階

Tel.**03-5432-1526** (代表)　Fax.**03-5432-1559**

http://setagaya-pt.jp

世田谷パブリックシアターは、東京都世田谷区太子堂の三軒茶屋駅前にある26階建ての高層ビル、キャロットタワーのなかにあります。東急田園都市線、東急世田谷線三軒茶屋駅と直結しています。

CarroMag. [キャロマグ] Vol.5 Jan.2015

通算第5号　2015年1月31日発行　(公財) せたがや文化財団・世田谷パブリックシアター

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー5階　Tel. 03-5432-1526　http://setagaya-pt.jp